

# 1892年、Michael Fieldの恋の季節

## ——*Stephania. A Trialogue* を読む

河内 恵子

### 中産階級と Michael Field

Michael Field は Katharine Bradley (1846-1914) と Edith Cooper (1862-1913) という、共同で創作活動をしていたふたりの女性作家のペンネームだ。ふたりは 30 作の戯曲と 11 本の詩集を残したが、彼女らの詩と歴史劇が多くの読者を得ることはなかつたし、実際に舞台で上演された戯曲は一作だけだった。しかし、熱心な読者は常に存在していた。そして彼／彼女らの多くが、Michael Field をひとりの男性作家だと、すくなくとも最初は看做していた。作家の真実の姿が時間の推移とともに明らかになってくると、女性ふたりの共同執筆に反感や抵抗をおぼえる読者や批評家も出現した。しかし、ふたりの創作意欲とお互いへの愛情は、何が起ころうとも決して変わることはなかつた。彼女たちがさまざまな批判を受けながらも執筆し続けることができたのは、いや執筆だけではなく、ロンドンで観劇を楽しんだり、好みの調度品や家具や贅沢な衣服を購入したり、幾度となくヨーロッパに赴き、美術館巡りを楽しみ、交友の幅を拡げることができたのは、豊かな経済力を持つ中産階級に属していたからだ。だが、この階級には独特的価値観があつた。

強大なイギリス帝国の土台を経済的に形成していた中産階級の人たちの保守的な価値観を支えていたのは、異端を排斥する「常識」というものの考え方だった。社会の秩序と国家の安定を維持し、自らの立ち位置を堅固なものに保つためには、破壊的な因子は除外する必要があった。彼／彼女らのこのような価値観を強力に支えていたのはイギリス国教会という権威であり、その頂点に位置するヴィクトリア女王は中産階級的意識の象徴であった。女王は、教会の首長であるばかりでなく、イギリス帝国そのものの頂点に存在する偉大な母でもあった。女王という母親の下、イギリス国民はひとつの大きな家族を形成していたといえる。仕

事という公的な領域 public sphere と家庭 home という私的な領域 private sphere との分化が明確なかたちで進んだヴィクトリア朝では、人びとは home とそこで営まれる heteronormative family life を非常に重要視した。Home こそは、さまざまな危険を孕む public sphere からの絶対的な避難場所であった。1870年代にはセンティメンタルな歌“Home, Sweet Home”が第二の国歌となっていた。(Dau 5) John Burnettが指摘するようにヴィクトリア朝の人たちはイギリス史においてもつとも“family-conscious and home-centred”であった。(Burnett 98)

バーミンガムの裕福な煙草商人の次女として生まれたKatharine には11歳違いの姉Lissie がいた。父Charles が1848年に癌で亡くなった後も、妻のEmma とふたりの娘が生活に困ることはなかった。学校に規則的に通わなかったものの、複数の家庭教師からフランス語、イタリア語、ドイツ語、古典文学、絵画等を学び、ふたりは豊かな教養を身につけた。とりわけ、Katharine は勉強熱心で、その関心は演劇にも向けられていた。

1860年にLissie が17歳年上のJames Cooper と結婚し、1862年に長女Edith を出産した。65年に次女Amy を出産した後に、Lissie は体調を崩し、これ以降病気がちとなったので、Emma とKatharine がCooper 家に手伝いに行った。叔母Katharine Bradley と姪Edith Cooper の同居はこのようにして始まったのだ。ここからは、Michael Field のすぐれた伝記を執筆したEmma Donoghue にしたがつてふたりをthe Fields と呼ぶことにしよう。母のEmma が1868年に亡くなつた後、Katharine は“homeless and motherless”(Donoghue 12)な旅人としてパリへ向かう。イギリスにhomeを持たない旅人は一種の自由を感じていたはずだ。実際、パリでカトリシズムの魅力に触れ、淡い恋愛も経験するのだから。しかし、結局は、homeへの強い思いが彼女をイギリスへと帰国させる。

### 始動の時

Katharine は最初の詩集 *The New Minnesinger* をArran Leigh という男性名で1875年に出版するのだが、この時から“the game of literary androgyny”(Donoghue 14)は始まったといえる。女性作家による作品は正当に評価されない可能性があるので、男性名で作品を発表するのは珍しいことではなかった。彼女は1875年に、Cambridge のNewnham College で学ぶ機会に恵まれた。また、この年にはJohn Ruskin (1819-1900) を知り、彼が代表を務めるthe Guild に義援金を出したりするのだが、意見の対立が起こり、1877年にはthe Guild から追放されてしまう。Katharine は姉夫婦のheteronormative home へと回帰してくる。

1878年頃にはKatharine とEdithとのあいだには特殊な関係が結ばれていた。ヴィクトリア朝のhome で同性愛的な時間と空間を共有することは困難だったが、夫婦、子供、結婚していない兄弟姉妹、使用人といったメンバーで構成されることが多かった中産階級の家族団においては、ふたりの関係がことさらに取り沙汰されることはないかった。ふたりは、古典文学や哲学を中心に学び、ダンテ、エリザベス朝の演劇、英米の詩作品を読み、両者の共通の関心の的であり、ヴィクトリア朝の人びとの心を強く捉えていたローマ帝国を背景とした戯曲を創作しようとしていた。彼女らは深く学び、多くを語り合い、それぞれの空間で創作し、書き上げた部分をお互いに修正しながら作品を完成させていった。Havelock Ellis (1859-1939) に共同創作の方法を訊かれた際に、Katharine は“The work is a perfect mosaic. We cross and interlace like a company of dancing flies.”(Donoghue 25) と応じたが、ふたりの最初の“mosaic”は1881年に発表された*Bellerophone*である。Arran and Isla Leigh 作として出されたこの作品には、詩作品と韻文で書かれた4幕の演劇作品が収められていた。Michael Field という作家名が用いられるようになるのは1884年からだ。“the unknown Mr Field's first volume”に収められた2本の歴史劇 *Callirhoe* と *Fair Rosamund* は批評家のあいだで高い評価を受けた。前者に登場するQueen Elinor の迫力のある描写や後者の作品に描かれるfemme fatale の存在感は読者の心をしっかりと捉えた。しかし、男性作家という仮面が剥がれ、作家は実はふたりの女性であるということが明らかになってくると批評家や読者のあいだで偏見にみちた失望の言葉がきかれるようになった。Michael Field のほんとうの姿が周知の事実になるきっかけをつくったのはRobert Browning (1812-89) だった。時代を代表する詩人 Browning は *Callirhoe* と *Fair Rosamund* を読んだ際にその才能に深い感動をおぼえて Edith に賞賛の言葉を贈ったのだが、感激した彼女は“strict secrecy”とことわりながら、叔母と自分自身の共作について話してしまう。Browning が秘密を守っていないことを知ったKatharine は1884年11月23日付の手紙で詩人に次のように語っている。

[I]t is said *The Athenaeum* was taught by you to use the feminine pronoun. [...] We each know that you mean good to us; & are persuaded you thought by “our secret” we meant the dual authorship. The revelation of that would indeed be utter ruin to us; but the report of lady-authorship will dwarf & enfeeble our work at every turn. [...] And we have many things to say the world will not tolerate from a woman's lips. We must be free as dramatists to

work out in the open air of nature — exposed to her vicissitudes, witnessing her terrors: we cannot be stifled in drawing-room conventionalities. [...] Besides, you are robbing us of real criticism — such as man gives man.  
(Qtd. in Thain and Vallido 311)

ヴィクトリア朝社会という男性中心の世界にあって正当に評価されるためには何が必要なのかを訴えて、この手紙は深い共感を呼ぶ。Browningはこの後、ふたりのメンターとしてさまざまな相談にのったり、アドバイスを与えるようになる。John Ruskinとの関係は良好とはいえたが、the Fieldsの芸術上の友人やメンターはほとんどが男性だった。Oscar Wilde (1854-1900)、George Meredith (1828-1900)、Lionel Johnson (1867-1902)、George Moore (1852-1933)といった作家たちと語り合うことで彼女たちはその文学の世界を深化させていった。人生の後半には、Charles Ricketts (1866-1931)、Charles Shannon (1863-1937)、John Gray (1866-1934)といった人物たちと宗教、芸術、病、家族等の問題を話し合うようになる。

### 異教の神々と歴史劇

The Fieldsは勤勉な作家たちだった。興味のある歴史的事項については徹底的に調査し、緻密な物語を構成し、登場人物たちの台詞には、ひとつひとつの言葉の意味と音を大切にしたうえで、リズムをもたらせるようにした。1885年にはスコットランドのRobert IIIと息子のDuke of Ramsayとの戦いを描いた*The Father's Tragedy*、12世紀のイタリアを舞台に展開されるドイツのHenry VIの悲劇を扱った*Loyalty or Love?*そして*William Rufus*の3作品が発表された。*William Rufus*には女性は全く登場せず、当時イギリス帝国が抱えていたアイルランド問題を、歴史劇の中で扱う意欲作だった。1886年の*Brutus Ultor*も戦いと復讐の暗いテーマを扱っている。

1885年の夏をノーザン・ヨークで過ごしたふたりは、この地の風景を織り込むことができるような物語を創りたいと思うようになった。歴史家のProfessor A. W. Ward (1837-1924)のアドバイスに従って、バイキングの歴史からKing Canuteを選び、*Canute the Great*を書き上げ、pastoral tragedyの*The Cup of Water*と共に1887年に出版した。それぞれの作品には独創的な人物が登場し、戦いと裏切りと狂気の舞台を巧みに彩っているのだが、いずれの作品も大きな成功に繋がることはなかった。

戯曲と同時進行で、ふたりは詩を創作していた。Michael Fieldの名前で最初に出版されたのは*Long Ago* (1889) である。この詩集には68作品が収められており、その大部分はSapphoを語り手としている。Phaonに対する彼女の報われない恋と若き詩人AkaeusのSapphoへの恋心をうたった詩が中心となっているが、日々の生活や月への崇拝を扱った詩も収められており、Michael Fieldの宇宙の広がりを見せて興味深い。

この詩集が発表されてから3ヶ月後の8月20日にCooperの母であり、Bradleyの姉であるLissieが54歳で亡くなった。Emmaと同様に癌が原因だった。Lissieの死はheteronormative homeの均衡を瓦解してしまった。妹と長女の関係を気にかけながらもふたりの創作活動に理解を示していたLissieを軸に形成されていたこのfamilyは、妻という最強のバランスを失った家父長のJamesの存在の脆弱さを浮き彫りにすることになった。それはKatharineとの確執というかたちであらわれた。Michael Fieldの仕事を評価しながらも父を支えようとするEdithの妹のAmyをも巻き込んで、堅固なprivate sphereであるはずのhomeはヴィクトリア朝的父権性を体現しようとするJamesと3人の独身女性というきわめてぎこちない空間へと変わった。

The FieldsはLissieの死を彼女たちの独自の宗教によって乗り越えようとした。ふたりは以前から、彼女らにローマ帝国を背景とした戯曲を創作させる原動力となっていた異教の神々に感謝して、庭に設置したディオニュソスの祭壇で「大地と天上の神々を拝します」と祈っていた。こうした異教の神々への崇拝とは別に、彼女らの宗教には“a cult of the dead”という重要な一面があった。教会へ行くかわりにhomeで死者の誕生日や命日に個人的に礼拝を行うのだ。死者に語りかけ、詩を朗読し、彼／彼女らを自らの内に生かそうとしたのだ。KatharineはHavelock Ellisに語ったことがある。

I am Christian, pagan, pantheist, and other things, the name of which I do not know. (Qtd. in Donoghue 36)

ヴィクトリア朝の価値観の根底に存在するキリスト教会と人心を束縛する宗教律から解き放たれた、自由な時空に存在している「自分」を強く意識した言葉だ。そして、この年の12月にはメンターとして信頼していたRobert Browningがこの世を去った。Edith Cooperが語っている。

We never wrote a song, without thinking how he would react to it [...] it will half-kill our poetry. (Qtd. in Donoghue 41)

同時代の社会と文学の動きと the Fields を結んでいたメンターとの別れは、彼女らに大きな喪失感を与えたが、苦しみこそが喜びを可能にするということを Katharine は知っていた。“I think perhaps the sole road to happiness is by the breaking heart.” (qtd. in Donoghue 42) という言葉は、別れと悲しみは、魂の自由へと、そしておそらくは、創作の自由に繋がっているという確信を示唆している。

結局、ふたりは Lissie の死と、この死がもたらした home という private sphere の崩壊の危険性を、以前から進めていた *The Tragic Mary* (1890) を書くことによって乗り越える。Mary Queen of Scots は、the Fields が描くことになる多くの囚われの女王たちのなかで、政治的な搾取と男の暴力に対して決然として立ちあがった勇気ある女性たちの象徴的存在となる。Oscar Wilde は Mary に人間としての肉体が備わっていると評価し、Lionel Johnson もこの作品に肯定的だった。

### Berenson 登場

1888年4月14日から書き始められた the Fields の journal、*Works and Days* は、それぞれの日記、手紙、批評、感想文、作品の構想、美術館や劇場のパンフレット等、ありとあらゆる記録を収めた28巻に及ぶ大著であり、彼女たちの肉声を伝えていて非常に刺激的だ。1890年にふたりはヨーロッパに赴く。以前から気になっていた美術の知識の欠如を補いたいという希望と数年前から取り組んでいる Otto III を題材にした新しい戯曲のために実地調査を行ったかったのだ。1890年6月10日に Edith Cooper は簡潔なメモを残している。“The Louvre (Venus, Bacchus, the head of Theseus & the Antique Sculptures — then the Room VII of the Early Italian pictures, where we met Mr. Berenson, a young Russian, qualifying to become an Art-historian, introduced to us by Mrs. Moulton — the Drawings) [...]” (qtd. in Thain and Vadillo 243) 実際は前日の6月9日に Mrs. Moulton のパーティで Berenson に出会い、10日には Berenson が the Louvre で行った講演に出席していたのだった。この後、Bernhard Berenson (1865-1959) は the Fields の人生と文学活動に大きく関わってくる。ふたりはこのリトアニア系アメリカ人の若き美術史家の官能的な美しさと彼の美術に関する知識に魅了される。特に Edith は、Berenson の彼女の気を惹くような言動に一喜一憂するようになる。16歳の頃から Katharine との愛と創作活動だけに生きてきた Edith Cooper にとって Berenson

はまさしくはじめて接する若い男だった。Katharine も Berenson の美貌に大いに惹かれていた。しかし、彼女が知的な友情関係をこの若き美術史家と構築したのに反して Edith はエロティックで、神秘的なプラトニックラブを彼に対して抱いていた。3人の関係を示唆する面白いエピソードが残っている。Berenson の恋人であった Mary Costello がオペラに行く際に、暑いから(上着なしの) ブラウスだけで出かけようと提案したとき、Berenson は Katharine に向かって「Mary は何を着ても似合うが、あなたはそうではない。男にみえてしまいますが」と語ったのだ。また、その後、the Fields の友人であった Arthur Symons (1865-1945) を口汚く罵った。*Works and Days* のなかで Cooper は書いている。

I summon to my eyes all their power of magnetic anger and cat-like brightness in the dusk. I concentrate their gleam and contempt on his till his lids drop. His eyes for an instant are terrified and ashamed. [...] We say goodnight — almost as if it were a curse. We hate him we hate him — I scarcely sleep. [...] He was guilty of the most intolerable offense — the humiliation of one woman by a compliment to another in the presence of both. His offense was rank. (Qtd. in Ehnnenn 82)

惹かれている男の矮小さを知った Edith の失望は大きく深い。同時に愛する Katharine の名誉を守ろうとする意識は強い。また、アメリカ人のフェミニスト Mary Costello には弁護士の夫と二人の子供がいたが、Berenson と一緒になるために離婚の準備を進めていた。この事実を知って Edith は驚き、悲しんだが、それでも、生まれてはじめての恋心をなかなか断ち切ることができなかった。

### Otto III と Stephanía

数年前から深い関心を抱いている神聖ローマ皇帝、Otto III のリサーチを本格的に始めたふたりは Berenson が作成した関連絵画のリストを携えて 1891 年 8 月 6 日に再びヨーロッパへと旅立つ。ベルギーからドイツへと旅し、アーヘンでは Otto III の墓の前に跪いた。ふたりにはドレスデンに滞在していた Berenson と Mary に会いたいという希望もあったに違いない。ところが、ドレスデンで Edith は猩紅熱に罹ってしまい入院を余儀なくされる。この体験は、the Fields の文学活動に大きな変化をもたらすことになる。

入院中に看護士に髪を切られた Edith は、最初は短い髪に違和感をおぼえてい

たにもかかわらず、自らの内から出現した新しい自分の魅力を認識するようになる。

She [=Edith] looks very pretty in her short boy's hair & fresh cotton jacket.  
(Qtd. in Thain and Vadillo 249)

この一文はドレスデンでKatharineによって書かれたのだが、後日、ロンドンでEdithによってjournalに書き込まれた。EdithはKatharineの言葉をとおして自らの少年化を肯定的に捉えている。また、「新しいコットンジャケット」は白地に黒と赤の水玉模様があり、数日間に5回も見舞いに訪れたBerensonとMaryからのプレゼントであったことが書き加えられている。

Edithを担当していた看護士は「美少年」に魅了され、彼／彼女を“Heinrich”と名付ける。Katharineはその名前の英語バージョン“Henry”を数あるEdithの呼び名に付け加える。

I [=Katharine] go into the garden & watch the fish, leaving P. [=Edith] with Schwester (the nurse), who encloses her with passionate arms & plunges down on her cheeks with kisses. “Ich bin so hungrig” [=I am so hungry] she said on a stifled sob that came out as a smile of anxious love. [...] P. kissed her cheeks, & then giving a little clap to the round, honest cheek, kissed her lips. “Danke, danke” she said, & it was her heart that spoke. Then she kissed P. again & again on her lips — great, spreading kisses.

(Qtd. in Thine and Vadillo 250)

I [=Edith] must fight nurse's unreasonableness. She comes while I am resting, throws herself about me & kisses with persistency of madness: I manage to make her understand she grieves & fatigues me — instantly with repentance she retires to the arm-chair, & I pretend deep sleep with anxious ears. She is called away & I slumber. She strives with herself & scarcely ever breaks out after — but the strain makes me dull by the time my Love [=Katharine] returns. (Qtd. in Thine and Vadillo 250)

アンドロギュノス的魅力を発散するEdith Cooperの存在に性的に惹かれる看護士

1892年、Michael Fieldの恋の季節

の肉体的な欲望。自らの内から生まれた美少年の魅力を認識するEdith。Berensonへの思いとKatharineへの熱情と看護士への思われぶりとMaryへの嫉妬。Edithのドレスデンでの日々は異様な熱を帯びている。こういった揺らぎのなかでOtto IIIを軸にした戯曲が練られていった。

周知のように、Otto III (980-1002) は、父Otto IIの急逝の後、3歳で王位を継いだ。摂政として母、祖母に支えられた後に、14歳で実質的な権力者となった。ドイツ王(983-1002)であるとともに神聖ローマ皇帝(996-1002)であったOtto IIIは古代ローマ帝国の復興を目指し、ローマ皇帝としての地位を確固たるものにする目的で、自らを“the Servant of Jesus Christ,” “the Servant of the Apostles”と称した。すぐれた知性と高邁な理想を持っていたが、ローマ貴族の反乱をおさえることに多くのエネルギーを消耗した。998年に反乱を幾度も企てたCrescentius IIを処刑し、その遺体をサンタンジェロ城の壁に吊るしたことは歴史上有名な事件である。この後1000年までのあいだに、一度は恩赦をあたえながらも結局はCrescentius IIを処刑した自らの行為を償うためか、巡礼の旅に出ている。この機会に隠修士Romualdに出会ったと伝えられている。また、幼き頃からの教師であるGerbert of Aurillacを教皇Sylvester IIに任命したのもこの時期であった。1002年、ローマへと赴く途中、原因不明の熱病でOtto IIIは21歳で没し、その遺体は、彼の終生の憧れであったCharlemagneが眠るAachen Cathedralに埋葬された。Otto IIIの死後、ローマではCrescentius IIの未亡人Stefaniaが若い王を誘惑し、毒殺したのでは、という噂が広がった。

The Fieldsは、上記のような激動の人生を生きた悲劇の若き王Otto IIIを主人公に作品を執筆するためにさまざまな準備を整え、1892年によく完成させた。ところが、発表された戯曲のタイトルはStephania. A Trialogueだった。これは、Otto IIIを中心とした作品ではないのだろうか。

1002年1月の3日間、場所はローマ。登場人物は神聖ローマ皇帝のOtho III、皇帝の幼少時からの指導者であるGerbert (Pope Sylvester II) と娼婦のStephaniaの三人だけだ。ローマ貴族Crescentius IIがOtho IIIに欺かれ、悲惨な最期を遂げた後、残された妻のStephaniaは、敵の兵士たちに集団でレイプされる。悲しみと恥辱を内に抱えてひとり自然を彷徨っていた彼女は自らの美しさが損なわれていないことを次第に認識する。

[...] then slowly in my heart / There swelled the pressure of a secret joy / As in the magic fountains I beheld / My form still beautiful, and recognized The

power of retribution in myself. (*Stephania* 4)

肉体の美しさを再認識するだけではなく、彼女は自然から薬草について学んでいた。人の心身を簡単に操ることさえもできる薬草の知識と外見の美しさを武器に娼婦として生きながら、*Stephania*は夫を殺害し、兵士たちに蛮行を許可したOthoに復讐する機会を狙っていた。3年後の1002年、*Stephania*はドイツ王であるとともに神聖ローマ皇帝であり、“Emperor of the Universe”になるという高邁な理想をもつOtho IIIを魅了し、薬草でその肉体と精神の均衡を奪い、死へと誘う。

Otho IIIは3年前の19歳の時に成し遂げたローマ制圧の折に、自らが犯した残酷な行為を悔恨する悩める王として登場する。彼は幼少時よりの教育担当者であるGerbertと強い絆で結ばれているが、隠者であるRomuald of Saint-Emmeranに苦しみを告白し、苦しみから解放されるためには、「王位と領土と夢を棄て、誠実に生きるべきだ」と忠告される。これを聴いたGerbertは、世界の霸者となる資質をもつ教え子に理想を達成する夢を思い出させる。“Romuald loves my soul as Gerbert loves the nature I was born with, and I perish between them, yearning for such unity as they proclaim impossible”(50)から明らかのように、Othoはふたりの教えのあいだで揺れる。そして彼をさらに苦しめるのが*Stephania*の出現だ。その美しさに惹かれ、また、過去の罪を悔い改める意図もあり、*Stephania*を娼婦ではなく、Crescentiusの未亡人、そして、ローマの新たな女王として宮廷に迎えいれるOtho IIIだが、彼女に自分がGerbertのどちらかを選べと迫られ、深く悩む。

You [Otho III] had been very humble at my [*Stephania*'s] feet, As now, an hour before; but when he [Gerbert] came / I was a thing to taunt, to set at nought, / And put away. (81)

Before he [Gerbert] comes, / I [*Stephania*] tell you, you must choose betwixt us twain:

Either dismiss him, or a second time / Look in my eyes forbiddingly. I scarce / Conceive a Pope is necessary now, [...] in my compassion I offered you my beauty to caress. / This Pope intruded ; he has spoken words / A woman may not hear ; he is my rival, / A bleached, old hypocrite ! (82)

二つの三角関係の拮抗する力に引かれて、Othoの判断力は鈍化する。そして、*Stephania*によってつくられた薬が彼の肉体の力を奪っていく。

また、例えば、“Otho bends over and softly caresses Gerbert”(19)やGerbertが幾度となく“Otho, my beloved”(80)と呼びかけ、その身体を“softly stroking”(77)している場面から読みとれるように、GerbertとOthoのあいだの同性愛的な交わりを勘案すると、Othoは同性愛と異性愛のあいだで引き裂かれる存在でもあることがわかる。“unity”を求めつつ死んでいくOtho IIIの悲劇は、さまざまな価値観のせめぎあいのなかで生きざるをえない人間の運命の不思議さを描いている。

この作品を三度読み返したGeorge Meredithは*Stephania*よりもOthoに共感すると述べている。Edithはこれを「奇妙な見解だ」ととらえ、Katharineはこの作品を“a feminist play”と称し、友人に“It is a woman's book, & women must defend it. Except a few dusty old cousins, all my women friends rejoice in *Stephania*. . . Men of course don't like this.”(qtd. in Donoghue 64)と述べている。

Emma Donoghueが示唆しているように、この作品にはthe Fieldsに、とりわけ、Edithに好意と無関心というあいまいな態度をとり続けたBerensonへの女の復讐というテーマが含まれているだろう。だが、それだけにはとどまらない。髪を切ることで自らの少年としての魅力に意識的になったEdithはOthoのなかに「女や恋」をまだ知らない美少年像をつくり込んでいる。両親が不在のOthoにとって、親であり教師であり愛の対象であるGerbertの姿にはKatharineの存在が投影されている。そして、OthoとGerbertとのあいだに割り込んでくる知性的Romualdと肉体の*Stephania*は、美術に関する豊かな知識と美しい容貌でEdithの心をとらえたBerensonを象徴している。また、*Stephania*のなかには強い怒りを内に秘めたEdithも存在している。怒りの感情を経験することによって、男を愛する女としての自分自身に気付いたEdithが存在しているのだ。Edithが後に友人に語ったようにBerensonと彼女は“twin soul”(qtd. in Donoghue 60)であり、きわめて似ているふたりが*Stephania*という力強いアンドロギュノス的な存在をつくりあげているのだ。このように考えると、*Stephania*の多層性がみえてくる。ローマ史を背景にした復讐劇というかたちをとりながら、この作品はthe Fieldsのフェミニスト宣言の書であり、自らの体験をとおして知った少年の魅力とアンドロギュノスの存在を芸術的に表現しているのだ。そして、もちろん、the Fieldsの苦しい恋愛体験の告白の書でもあるのだ。

## 1892年、終わりと始まり

1892年の終わりに、Katharine と Edith はそれぞれ「作品を発表したが、批評はほとんどない。私たちの仕事を理解してくれる友人は少ない。苦しい愛を経験した」といった内容の日記を書いている。そして、Edith はこう記している。

I long for all things to be made new, & have to keep old myself. I long for freedom. [...] I do not care for my work as I used to do — It does not grow up in me like quickened seed — it grows from node to node like a yew.  
Now and then it stirs verdantly & I am happy.  
(Qtd. in Thain and Vadillo 257)

これは、決して幸福ではなかった1892年を生き抜くことで、新しい自分と新しい創作方法と、そして、なによりも、自由を希求した作家の重い言葉だ。Stephania に “women use their pain to find the pain of others” (*Stephania* 37) と語らせた the Fields の声は、Katharine の “I think perhaps the sole road to happiness is by the breaking heart” という言葉と重なる。1892年は転換の年だった。今、苦しみをひとつの創作活動のエネルギーとした the Fields は新しい芸術を模索し始める。

## Bibliography

- Bickle, Sharon, ed. *The Fowl and the Pussycat: Love Letters of Michael Field, 1876-1909*. Charlottesville: Virginia UP, 2008.
- Burnett, John. *A Social History of Housing, 1815-1985*. London: Methuen, 1986.
- Dau, Due and Shale Oreston, eds. *Queer Victorian Families: Curious Relations in Literature*. London: Routledge, 2015.
- Donoghue, Emma. *We Are Michael Field*. 1998. London: Bello, 2014.
- Ehnenn, Jill R. *Women's Literary Collaboration, Queerness, and Late-Victorian Culture*. Aldershot: Ashgate, 2008.
- Field, Michael. *Callirhoe and Fair Rosamund*. 1884. California: Library of the University of California, 1997.
- . *Canute the Great, The Cup of Water*. 1887. Marston Gate: Amazon, 2015.
- . *The Tragic Mary*. 1890. London: British Museum, 1990.
- . *Stephania. A Trialogue*. 1892. London: British Museum, 1993.
- Fraser, Hilary. *Women Writing Art History in the Nineteenth Century: Looking Like a Woman*. Cambridge: Cambridge UP, 2014.

## 1892年、Michael Fieldの恋の季節

- Gallagher, Lowell, Frederick S. Roden and Patricia Julian Smith, eds. *Catholic Figures, Queer Narratives*. Basingstoke: Macmillan, 2007.
- Gavin, Adrienne E. and Carolyn W. de la L. Oulton, eds. *Writing Women of the Fin de Siècle: Authors of Change*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012.
- Stokes, John. *In the Nineties*. London: Harvester, 1989.
- Thain, Marion. *Michael Field: Poetry, Aestheticism and the Fin de Siècle*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Thain, Marion and Ana Parejo Vadillo, eds. *Michael Field, The Poet: Published and Manuscript Materials*. Toronto: Broadview, 2009.